

「純粹文學史の夢想

——「書評・川合康三編『中國の文學史觀』」を讀んで——

大谷大學教授 乾 源 俊

謹啓 過日は『中國の文學史觀』の書評をお送りいただきありがとうございました。どのようにお答えすべきか考えあぐねておりましたが、先日、川合先生、西上さん、和田さんとこの書評について話す機会がありました。そこでの意見交換を踏まえて、わたし自身の視点から、感想をすこし述べることにいたします。それに先立ち、まず述べておきたいのは、この本を取り上げて批評していただいたこと、しかも合宿までして丁寧論じていただいたこと、その扱い自體がわれわれにとっての評價であり、嬉しいことである、感謝の念に堪えない、ということです。皆、口をそろえて言っていました。そのような姿勢で書かれたものに對して、なかなか反論というかたちにはなりにくい。感想というのはこうした理由からです。

「文學史」は十九世紀西歐の歴史學から出たものであり、「中國文學史」も例外ではない。明治期の中國文學史にあらわれる文學史觀はどのようなものか、またそれは中國古來の文學史觀とどのように違うのか。當初の問題設定をごく大づかみに捉えればこうなる。そしてその結果は、明治期の文學史觀に關して言えば西上論文がまとめている、と言えるでしょう。一方、中國古來の文學史觀については、和田氏の「古と今の文學史」がもっとも詳細な考察となっている。

これは中國において文學史的思考がどのように發生し展開したのか、その思考様式を分析し特徴を抽出したものです。ただしこれは一九九七年の『日本中國學會報』第四十九集に發表され、當書に收録されなかった。原理的な側面について考察するこの論者が、當書において序に續く場所に配されたならば、書評中の傳統的文學史觀に關する疑問のおおかたは解消されるでしょう。文學史、文學史觀、文學史的思考といった用語の定義が明解になされていますし、西歐における文學史モデルについても、すこしですが觸れられています。

當書のわかりにくさのひとつには、うち明けて言えば、母胎となった共同研究における基本的な姿勢が關與していると思います。それは、主催者の川合氏によって問題提起されたテーマをどのように扱うかについて、各構成員にかなりの自由な裁量が認められている點です。あらかじめ主催者によって考えるべき問題が割り振られ、その制限のなかで各人が書いたとしたら、首尾は一貫しもっと読みやすいものにはなっていたでしょう。しかしそうした仕方は採らなかつた。提起された問題をむしろ自身の關心に照らし解釋して書くことを求められた。その結果、多方面へと議論が及び、當初の問題設定にとうてい収まらないものがひとつの本のなかに入ってきた。當書の各章は、そもそもまっすぐ一本の筋道にしたがって讀むようには書かれていないということです。三年にわたる共同研究の時間なかでは、個々に、あるいは全體として、考えの進展があり、先の和田論文のように、なかには成書を待たず先だって世に問われるものも出てくる。わたし自身の問題に關連するかぎりにおいて、擔當部分で和田氏や川合氏の他の論文を引用しておきましたが、もしこうしたものを含めて思考過程の全體を讀んでもらえるなら、さらにいくらかの疑問は解消されるのではないかと思います。

さて、そのわたしの擔當部分についてですが、西上氏や和田氏が當初の問題設定に忠實に思考しているのに比べて、ややはずれた視點からの考察となっている。それはご指摘のとおりです。いまあらためて作業内容を要約すれば、唐代

の文學史觀は基本的にそれ以前のものの繼續であり、折衷であり、新しい考え方によって更新されるわけではない。そうしたなかで注目されるのは、政治史ディスクールとの關係である。唐朝の公式的な文學史ディスクールは政治史のコンテキストを補完するように構成されている。唐朝にとって都合よく構成される歴史の一部分をなすのである。そのイデオロギー的な側面が復古論者へと受け継がれ、復古文學史觀の形成に關與するのではないか。というものです。なお、文學史ディスクールが政治的な立場と切り離せないという視點は、二十世紀文學を對象とした戴氏の論考にも見られ、わたし個人としてはとても興味深く讀みました。こうして結論は、當書の書かれたそもそもその意圖と交わってくる。われわれが標準的な唐代文學史と考えていたものが、じつは當時においてそうではない。それは後世の視點から、それを唱えるひとに都合のよいように作り出されたものではないかと。この本のもっともおおきなねらいは、われわれが自明のこのように理解している文學史が、じつは歴史的ななりたちをもっているということを明らかにすることでした。あらかじめそこに備わっている、と考えられていた内容が、じつは意圖をもって取捨選擇された結果であり、本來ひとつの可能性にしか過ぎなかったのだ、ということ。

當書の趣旨を「新しい文學史觀」創造への提言と理解されたことは、正直なところすこし驚きました。その場合、「新しい文學史觀」と、それによる「新しい文學史」がどのようなものを想定しているかによります。過去の中國文學のなかにあらわれた固有の文學史觀によって再構成されるもの、現代の文學理論が提示するような文學史の理論モデルによって解釋されるもの、いずれにしてもそうしたものを想定したとすると、そこにあらわれてくるものはいかに様相が變わっていたとしても、現行の文學史の分身にすぎない。とすると當書の意圖するところは結果的に逆を行っていることになる。そうした文學史はもはや不可能なのだ、ということを行っているわけですから。十九世紀の歴史學が無邪氣に信じていた出來事の事實性のうえにたつ歴史觀がもはやたちゆかず、歴史もまたフィクションであると考えられ

るのとおなじように、そこから出た文學史もフィクションである。こうした立脚點を確認してこそ、われわれの文學史は可能になるのではないでしょうか。中國の文學史觀を採る作業のなかでみとめられたのは、創作論とつながった「書くための文學史」であり、あるいは王朝の正統性を主張するための文學史であった。何かの用途のために、その行爲を基礎づけるものとして文學史は必要とされてきた。文學史はその用途に應じて、それがフィクションであることにより、現實に力を及ぼすことになる。西歐の文學史も國家の成立、民族の勃興という文脈で起こってきたということであり、明治の文學史はその點どうであったのか、成否は用途の如何にかかっていたと言えるでしょう。そのように考えれば、現在においてもどのような文學史も可能であることになる。現代の理論モデルも現實世界の仕組みを理解するという用途と離れてのことではないでしょう。學術的探求の目的としての文學史も、それを構想する主體が現象をどのように理解しようとするのか、そのひとなりの文學史觀が必要とされる、ということではないでしょうか。たとえば、「母胎文學」という考え方のような。と同時に、文學それ自身のための文學史、純粹状態の文學史、というものは、想念のなかに存在するだけで、實現不可能な文學史ということになります。「新しい文學史」とは、そのような無數に實現可能な文學史のことであり、すくなくとも唯一の文學史觀による普遍的な文學史のことではないと思います。

あるいは誤解があるかと恐れます。すでにわかりきったことを繰り返しているだけかもしれません。妄念かもしれない。ひとまずは心に浮かんだことを記してお應えとしましたまでです。ご諒恕のほど。書評執筆者のかたがたにくれぐれもよろしくお伝えください。重ねて御禮申しあげます。

二〇〇四年八月二十八日 乾 源俊 頓首